

## エラスムスにおける『反野蛮人論』とヒューマニズム

畑 宏 枝

### はじめに

エラスムスが最初に自己の見解を明確に表した彼の代表作『エンキリディオンは、人を「敬虔」へと導こうとする建徳的書物である。そしてキリスト教思想家であるなら当然のことであるが、この「敬虔」、また真のキリスト者となることが、エラスムスの思想全体において重要なテーマとなっている。ところでこの『エンキリディオん』を一つの節目として、彼の精神・思想的発展の過程を、それにいたる初期の時代とそれ以後に分けることができる。この初期とは、エラスムスがステインの修道院に入った一四八七年（一八歳）から『エンキリディオん』執筆した一五〇一年（三二歳）までの間である。この間エラスムスは一四八七年から一四九三年を修道院で、一四九三年から一四九五年をカンブレイの司教ベルゲンのヘンドリックの秘書として南オランダで、一四九五年から一四九九年をパリ大学で神学の勉強のために過ごした。その後イギリスに渡って、エラスムスに多大の影響を与えたといわれているジョン・コレットに出会っている。この時期の彼を知るためには多数の書簡（ステイン時代二七通、南オランダで五通、パリ時代五一通、イギリスで一三通）、修道院で書かれた多くの詩と『現世の蔑視』（*De contemptu mundi*）、そして

同じく修道院時代に筆を起し、一四九四〜九五五年に書き直された『反野蛮人論』(Antibarbarorum Liber)がある。『反野蛮人論』は野蛮人、つまり良き文芸 (bonae litterae) や教養 (eruditio) を軽蔑する人たちに対して、それを弁護するために対話の形で書かれた書であるが、この小論ではこの書においてエラスムスが古代ギリシア・ローマの文化とキリスト教、およびキリスト教的敬虔との関係をどのように捉えていたのかを検討することにする。

## 一 「ヒューマニズム」という語

「ヒューマニズム」という言葉は今日一般的に広く使用されているが、広く使用されているが故に、この言葉に対して抱くイメージは人によって微妙に異なっている。また「エラスムスはヒューマニストである」とは、エラスムスに対する最も一般的で共通の評価であるが、「ヒューマニスト」という言葉に与える意味の相違によって、この評価の実質的内容も人によって異なるであろう。

ところでP・O・クリステラーによると、「フマニスムス」(Humanismus) という用語は、ドイツの教育者F・I・ニートハンマーによって一八〇八年に作り出されたもので、中等教育においてより実際のなより科学的な訓練を要求する声が高まってきたことに対抗するものとして、ギリシア・ローマの古典への強調を表明するためであった<sup>1)</sup>。しかしこの言葉は更に、一四〜五世紀に造り出されたフマニスタ (humanista) つまりヒューマニスト」という用語をその起源として持っている。フマニスタは、キケロやゲリウスなどの古代ローマの著作家たちによって用いられた「フマニタス研究」(studia humanitatis) から派生した言葉で、古典語・古典文学の研究に携わる人々のことを指した。そ

してこの「フマニタス研究」は、ルネサンス期には「文法、修辭学、詩、歴史学、道德哲学」の分野を指すようになった。<sup>2)</sup>つまり当時ヒューマニストたちはギリシア・ローマの古典の研究に携わる人たちであったのだが、重大な問題はそれがキリスト教とどのように関わるのかということであった。そしてエラスムスも他の多くのヒューマニストたちと同様に、この問題に直面したのである。古典古代の研究に携わったという意味で、エラスムスはもちろんヒューマニストである。したがって問題はエラスムスが「ヒューマニストであるのかどうか」ということではなくて、彼が「どのようなヒューマニストであるのか」、つまりキリスト教と古典文化の関係をどのように考えたのかということである。

この問題について多くのエラスムス研究者が、「エラスムスはキリスト教と古典文化の統合 (Synthesis) を試みた」と指摘している。しかし残念ながら、そして意外なことにこれに対して具体的な内容の説明が十分にはなされていないのである。つまり多くの要素を含む古典文化の何をキリスト教と統合するのか、そしてそもそも「統合」とは具体的に一体どういうことであるのかが非常に曖昧なのである。したがって、「反野蛮人論」という書において、彼が古典文化の何をどのようにキリスト教と関わらせたのかを明らかにすることが大切である。この作品の成立・出版過程はやや複雑であるので、まずこれについて簡単に説明する。

## 二 『反野蛮人論』の成立・出版過程とその構成

『反野蛮人論』が出版されたのは一五二〇年、つまりエラスムスが五一歳のときである。しかし『反野蛮人論』に

関する最初の証言は一四八九年頃、つまり彼が二〇歳のときに友人のコルネリス・ゲラルドに宛てた書簡のなかに見出だされる (A. 30)。それによるとこの頃エラスムスは、「ゲラルドのオラチオ」(oratio) という形で「教養のない人々」(illiterati) を批判する小品を書いた。しかし一四九四年頃のある書簡 (A. 37) と「反野蛮人論」の一五二〇年版の序文 (A. 110) によると、エラスムスはこれを対話の形で四部からなる作品に大幅に拡大しようと試み、一部と二部を書き上げた。これを書いたのは、他の書簡の幾つかの証言から (A. 46, A. 11)、一四九四年か九五五年の春であり、エラスムスが二四歳か二五歳のときである。彼はこの一部と二部を一五〇六年頃イタリアで更に改訂して、イタリアを去るときその草稿を三部と四部の資料とともに友人のリチャード・ペイスに預けるが、ペイスはこれらを別の友人に預け、その後この草稿は紛失してしまう (A. 110, A. 1, A. 244 など)。エラスムスはこれら紛失した草稿、特に雄弁 (eloquentia) について書かれた第二部を何とかして取り戻そうとするが失敗に終わる。そうこうするうちに彼は一五一七年ルーヴァンで、一四九四年に書いた第一部の草稿が一般に流布しているのを発見し、これを不快に思う。そこでイタリアで書いた草稿の発見をなおも期待するが、結局見付けることができず、一四九四年に書いたものを修正して、これを一五二〇年に出版した。エラスムスはイタリアで書いた第一部の草稿には相当執着していたらしく、死ぬ前年までこれを手しようと思きらめなかつたが、結局現在に至るまでこれは発見されていない。このようなわけでタイトルは「反野蛮人論 第一巻」(Antibarbarorum Liber Primus) なのであるが、「第二巻」は現存していない。今世紀始めに、一四九四〜九五五年に書かれた第一部の草稿の写本がアレンによって発見され、A・ヒーマが一九三〇年にそれを出版した。この写本と一五二〇年に出版されたものを比較すると、相違点として文体上の小さな訂正や語順の変化、また一五二〇年版では修道士に対する批判が強くなり、いくつかの文章が加筆されているが、そ

の他には根本的な変化はみられない。

次にこの書の構成であるが、舞台設定は、当時エラスムスがベストを避けて滞在していたベルゲン・オブ・ゾーム近郊のハルステーレン (Halsteren) という田舎で、五人の友人たちが「良き学問」(bonae litterae) をテーマとして話をすすめるという形をとっている。一応対話なのであるが、話のほとんどは登場人物の一人であるベルゲン市の秘書ヤコブ・バトス (実在の人物) によって占められ、彼がエラスムスの代弁者となっている。対話は「最良の学芸」(optimae artes) の衰退の原因についての議論から始まり、良き学問の弁護、第一コリント書八章一節の「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」について、ヒエロニムスとアウグスティヌスからの引用、という具合にバトスの話が続く。このバトスの言わば一連の演説から、エラスムスが古典文化の何をどのようにキリスト教に採り入れていったのかを明らかにしたい。

### 三 エラスムスは古典文化から何を採り入れたのか

#### (一) 「良き学問」(bonae litterae) について

エラスムスが弁護しようとしているのは〈bonae litterae〉であるが、〈litterae〉は異教徒たちによる他の様々の発明のうちの一つに数えられている。それは例えば斧や鋸、楔、定規など、鉄や銅の加工、織物、染色、金属の鑄造などである。これら異教徒による様々の発明を列挙したあとで次のように述べている。「従って悪しき精神によって発明されたこれらのものの使用があなたがたに許されるのなら、学識豊かな人々の〈litterae〉の使用も我々に許されるの

ではないでしょうか。……私たちがラテン語で書き、ともかくラテン語で話すということ、私たちは異教徒から受け取りました。彼らによって文字 (Characteres) が考えだされ、語るということ (Oratio) が発見されたのです。<sup>1)</sup> 従って <litere> は、言葉 (特にラテン語) に大きく関与したものであることがわかる。この <litere> は『反野蛮人論』のなかで形容詞とともに次のように使われている。<prophanae literae> <humanitatis literae> <litere seculares> <bonae literae> などである。<litere> は、書かれたもの、文字、手紙、文書などの意味があるが、『反野蛮人論』では学問的知識・教養、学問的研究、学問のことである。ギリシア・ローマの古典文化から受け継いだものとしてエラスムスが <litere> の他に、その同義語として弁護しているのは <eruditio> と <disciplinae> である。単独で、あるいは <prophana eruditio> <liberator eruditio> <disciplinae liberales> <humanae disciplinae> などのように使っている。<eruditio> の意味は、教えること、また教えることによつて得られる教養、あるいは博識である。<disciplinae> も教えること、そしてその内容、知識、学問、教養である。<litere> <eruditio> <disciplinae> はほとんど同義語で、教授されることによつて、つまり学ぶことによつて獲得される知識・教養、あるいは学問のことである。

では次にエラスムスが『反野蛮人論』で述べている、ギリシア・ローマの文献を研究することによつて得られる知識・学問の具体的内容を明らかにしよう。

「ある人が非常に学問 (litere) に精通していると、その人は非常に不道徳であるにちがいないと一般的に言われているのを私は聞きます。この侮辱は修辞学の教師や詩人たちだけではなく、神学者、法学者、弁証家また他の学識豊かな人々にも向けられています。このような侮辱は「これら」すべての人々によつて反駁されなければなりません。<sup>2)</sup>」あるいは、「彼ら (野蛮人たち) は詩 (poetice) をみだらな業だと考え、修辞学 (hetorice) をおべっか以外の何も

のでもないともみなし、地理学 (geographia) と天文学 (astrologia) が占いのような穿鑿好きで好ましくない業 (artes) であると信じています<sup>61)</sup>。またヒエロニムスの書簡 (Ep. 53. 6. 1) を引用して、自由学問 (artes liberales) として次のものを挙げています<sup>62)</sup>。すなわち文法、修辞学、哲学、幾何学、弁証学、音楽、天文学、医学。ところでエラスムスはこの「反野蛮人論」を書く少し前に、ブリュッセルに近いグレーネンデルの修道院でアウグステイヌスの著作を見付けたが、その中に「キリスト教の学問」(De Doctrina Christiana) もあった。エラスムスはこれから大きな影響を受けたと思われるが、そのうち二巻の一九章から四〇章までの間の十箇所を「反野蛮人論」で引用している。このなかでアウグステイヌスは「既に成就されたもの、あるいは神によって制定されたもの」としてほとんどすべての自由学問 (liberales disciplinae) を含めていると、エラスムスは述べている<sup>63)</sup>。すなわち論理学、修辞学、自然学、幾何学、天文学、音楽、歴史、文法、弁証学であり、また次のようにも述べている。「弁証学、修辞学、自然学、歴史などのような人間の才能 (ingenium) によつて発見された諸学問 (disciplinae) は、アウグステイヌスには金銀で刻印されているように見えた、と彼は書いています。なぜなら人間はこれらのものを、《自分で作りだしたのではなく、どこにも注ぎ込まれている神の摂理 (providentia) という鉱山から言わば金銀のように掘りだしたからです》」<sup>64)</sup>。

また「反野蛮人論」の最後のところで、この作品のテーマが何であるかがはっきりと示されている。すなわち対話者の一人であるベルゲン市の市長グワイエルムス・コンラドゥスが次のように尋ねる。「今それについて私たちが議論した世俗の学問 (prophane literae)、すなわち弁証学や修辞学や詩を、聖霊は使徒の誰にも注ぎ込みませんでした<sup>65)</sup>」。エラスムスの代弁者であるバトスはこれに簡単に答えたあと、それぞれの学問の役割について次のように説明する。「もしも言葉を正しく話したり、話されたことを理解することが単に賦与されるものであるなら、文法の教師

があわれな青年たちを苦しめ悩ます理由は何もありません。もし人間の精神がいかなる覆いにも妨げられずに、容易にまた瞬時に真理を認識し明らかにすることができるといふほどのものであるなら、私たちが推論や弁証的精妙さの訓練を受けることは意味がありません。私たちが心の感動を自在に自分のもとにとどめておいたり、また他の人々のなか呼び覚ましたりすることができれば、修辭学の教師の指図を受ける必要はありません」<sup>10)</sup>

以上のことから、エラスムスが弁護しようとしている世俗の、あるいは異教徒の学問とは、文法、修辭学、弁証学、自然学、数学、音楽、地理学、天文学、歴史、法学などであるが、特に重点が置かれているのは文法、修辭学、弁証学、詩などの言語、表現法、推論の方法に関するものであることがわかる。

## (2) 「知恵」(sapientia) について

しかしエラスムスが異教徒の文化から採り入れたのは、今述べたような学問ばかりではない。なぜなら次のように言われているからである。「異教徒たちに彼らの悪徳、迷信、情欲、欲望を残すことは私たちにふさわしいことです。これらのものをその所有者のもとに残すべきだとわたしは言います。しかしもし異教徒たちが知恵という金、雄弁という銀、良き学問という調度品を持つていいるなら、それらすべてを荷造りして、私たちの役に立つように適応させなければなりません。盗みの謗を恐れるのではなく、むしろ敢えてその行為の素晴らしさに対する称賛と報酬を期待しようではありませんか」<sup>11)</sup> ここでいわれている銀としての雄弁(弁論術)は、先の文法、修辭学、弁証学、詩などを総合的に実践するものである。エラスムスはこの雄弁を特に取り上げて、第二部のテーマとしたのであるが、先にも述べた通り残念ながらこれは現存していない。さてそこで問題となるのは金としての知恵、異教徒たちの知恵が何を意

味するののかということである。これは『反野蠻人論』を読めば一目瞭然である。この作品の中にはギリシア・ローマの古典文献から取り出された人名、地名、慣用表現、格言、引用句などが一五〇箇所ほど盛り込まれ、そのうち五〇ほどの表現が、後にエラスムスが出版した『格言集』（初版一五〇八年）に収められている。

二〜三例を挙げてみよう。良き学問に反対する人々を批判している次のような文章がある。「あのようなアルカディアのろばたち、あるいはあなたが好きななら、アントロンのろばたちは……クインティリアヌスが言うように、自信と権威を鼻に掛けて『自分自身の愚かさをあますところなく教えています』（*stultitiam suam perdocent*）」<sup>(27)</sup>。アルカディアはペロポネソス半島の羊飼いたちの土地で、粗野で田舎者だと思われていた。アントロンはテッサリア（Thessalia）の町で、多くのろばがいることで有名だった。クインティリアヌスについては、『弁論術入門』（*De institutione oratoria*）一・一・八からの引用で、そこには「暴君たちは荒れ狂い、自分自身の愚かさをあますところなく教えている」とある（*imperiosi atque interim saevientes stultitiam suam perdocent*）。

次に、あまり能力のない人は良き学問を学ばない方がよいことについて次のように述べている。「しかしながら私は次のことは敵たちに譲ることにしましょう。すなわちあまり才能のない人、あるいはとても理解の遅い人には、難しい学問知識（*disciplinae*）を遠ざけておくことは許されるということです。さもないと、驢馬が堅琴に引っ張って行かれて、学ぶ方も教える方もその苦勞が無駄になってしまふからです」<sup>(28)</sup>。ここにある「驢馬が堅琴に引かれていく」（*asinus ad lyram*）は「豚に真珠」「猫に小判」と同類の格言であるが、エラスムスの『格言集』一・四・三五によると、ウァローの『風刺詩』の一つ（543）の題としてこれが使われており、他にはゲリウスやヒエロニムスもまたこの表現を使っている。

次に最後の例として、「聖ベルナルドゥスの教師はオークの木やブナの木だった」と言われていることについて、エラスムスはプラトンの『パイドロス』を引き合いに出して次のように述べている。「私はベルナルドゥスに驚きます。教えてもらいたいときに人々のところではなく樹木のところへ行つて、あのプラトンのソクラテスに倣わないのですから。パイドロスはソクラテスに田舎の特別素晴らしい場所を示して、ソクラテスがその美観にことのほか魅せられたのに気付き、彼がそれまで町から出て田舎に行ったことがないことに驚いた旨を伝えました。ソクラテスは全く上手に答えています。『大目に見てくれ給え、親愛なるパイドロス。私は学びたくてたまらない人間なのです。ところが土地や樹木は私に何も教えることはできませんが、町にいる人々は教えてくれます』(930 C D)」<sup>15</sup>

さてこのようにギリシア・ローマの多岐にわたる文献から、自由自在に材料を取り出して、巧みに自分の文章に生かすこと、そしてその内容は哲学的なものよりはむしろ教訓的なもの、ことわざ、経験によつて知られるような人生の知恵であり、エラスムスがすぐれた遺産としてこの人間の知恵を尊重したということ、このことがエラスムスが古典文化から採り入れたもう一つの重要な要素である。これはエラスムスのような驚くべき記憶力と文章力、そしてユーモアのセンスを兼ね備えた人にして初めて可能であった。特にドイツ語圏のエラスムス研究者たちはこの点を見落とすか、あるいは積極的評価を与えない傾向があるように思われる。しかしエラスムスの非常にエラスムスらしいところはこのようなところにあるのであり、当時の人々（といつても、ラテン語の能力の相当ある人々）が心を動かされ、何か新鮮なものを感じ得たのもこの点にあるのである。

## 四 キリスト教と古典文化

### (1) 良き学問と雄弁の役割

さてエラスムスは次のように述べている。「異教徒の発見したものの中にはある種の差異があります。つまり一方は無益で、危険で、有害ですが、もう一方は非常に有益で、健全で、必要ですらあります。悪いものは彼らに残しておくべきですが、良いことは私たちのために利用すべきではないでしょうか。そしてこのことこそキリスト者の、慎重で学識豊かな人のすべきことです」<sup>16</sup>。ここにあるようにエラスムスは古典文化を慎重に選り分けて、先にも述べた通り良き学問と雄弁と知恵を選択したのであるが、それはキリスト教にとって有益であり必要であるからである。そこでどのように有益で、また必要であるのかエラスムスの考えをみていこう。

まずエラスムスはヘシオドスによる人間の分類を利用して、第一のグループに属する人を「何が良いことかを自分で理解していて、それに従う人々」としている。そしてこの人々を「学識があり良い人々」と形容している<sup>16</sup>。つまり学識ある人々は、何が良いことか知っている人々である。

次に「もしすべての人々が学識のない人 (illiteratus) になってしまったら、無知な人々の誤りを一体誰が直すのでしょうか」<sup>17</sup>といわれている。つまり学識ある人々は、何が良いことか知っているので、次の段階として他の人々の誤りを直すことができる。

このことを更に、殉教者と学識ある人々(学者)の比較を通して次のように説明している。エラスムスは殉教者の栄光を低めるものではないとしながらも、「私たちは殉教者たちよりも異端者たちにより多くを負っています。……

もし学識ある人々が書物によってキリストの教えを異端者たちから守らなかつたら、殉教者たちは勇敢ではありませんがキリストの教えのためにその血を無駄に流したことになります<sup>18</sup>。従つて先の「何が正しいか知っている」の正しさは、キリストの教えを基準にした正しさであり、キリスト教的真理のことであり、学識ある人々の役目は異端者たちからキリスト教の正しい教えを護ることである。そしてこの学識ある人々とはエラスムスにとつて教父たちであった。エラスムスはヒエロニムス、アウグスティヌス、キプリアヌス、クレメンス、ヨハネス・クリソストモスなど多数の教父の名前を挙げて彼らを賛美し、彼らの学識をキリスト教的教養 (*eruditio Christiana*) と呼んでいる<sup>19</sup>。また学識と敬虔を備えた人としてトマスとスコトウスの名前も挙げてゐる。エラスムスとつて広い意味での教養とは、この教父たちに関する知識を含むものである。

さて学識ある人々のもう一つの役割についてエラスムスは次のように述べてゐる。「正しく生活してゐる人は確かに偉大なことをしていますが、しかしそれは自分にだけあるいは彼と共に生活してゐる少数の人にだけ有益です。しかしもし学問知識 (*doctrina*) がこれに付け加わり、そして更に……その人が心の最も美しい想い (*conscientia*) を言葉で刻み込むことのできる人であれば、すなわち学識のある人であると同時に雄弁な人であれば、この人の有益さが最も広く留まることがはまちがいありません。彼の友人や、仲間や、近くにゐる人々だけにではなく、知らない人にも、後の時代の人々にも、遠隔の地に住んでゐる人々にもです<sup>20</sup>。そこで学識があり、かつ雄弁な人々の役割は、正しく護られたキリスト教の教えを、すべての人々に時と場所を越えて伝え、広めることである。ここで注意しなければならぬのは、エラスムスにおいては雄弁は実際に人々の前で上手に話すこと (説教) ではなく、書物のなかで上手に語ること、つまり文章の巧みさである。

以上のことから学識ある人々とは、まずキリスト教の正しい教えを理解し、次に人々の誤りを正してキリスト教を弁護し、それを人々に広く伝えるのだが、雄弁が加わると更にそれは広められ易くなるのである。エラスムスはこのような学識を出来るだけ多くの人々が持つべきであると主張する一方で、これが特に指導的立場にある人にあてはまるとも述べている。<sup>22)</sup>

残された問題は次のことである。すなわち学識ある人々、教父たち、つまり文法、修辭学、弁証学、自然学等に精通した人々はどうしてキリスト教の正しい教えを理解することができるのかということである。これは、いかにして聖書を正しく解釈できるのかという聖書解釈に関わる問題である。つまり聖書も言葉で書かれたものである以上、言葉そのものの意味や規則、つまり文法、表現法などを十分に知っていないと正しい解釈はできない。「キリスト教的学問」(De Doctrina Christiana)の一卷一・一でアウグスティヌスは次のように述べている。「すべての聖書解釈は二つの方法に基づいている。それは理解されなければならないことを見いだす方法と、理解されたことを表現する方法である」。そしてアウグスティヌスは「二巻を理解の方法にあて、四巻で表現の方法について論じている。ところがエラスムスは『反野蛮人論』では、学識ある人々はキリスト教の正しい教えを理解できる、というにとどまり、さらにその理解の方法論を論ずるまでには到っていない。エラスムスは『キリスト教的学問』の聖書解釈に関する第二巻から引用しているにもかかわらず、自らは聖書解釈の問題に取り組むことはしていない。『反野蛮人論』での強調点は、聖書を理解するための基礎知識としての良き学問よりは、むしろ理解したことを上手に表現する手段としての良き学問、雄弁である。それはエラスムスがこの『反野蛮人論』を執筆していた頃(つまり二四〜二五歳のとき)に彼が没頭していたのは、古典文化の遺産を吸収し、また教父たち、つまりキリスト教の正しい教えを理解した人々

の思想を学ぶことであり、聖書解釈の問題を中心に据える余裕は残っていなかったからである。聖書解釈が彼の重要なテーマとなり始めるのは、もう五、六年先のことであり、また『ギリシア語新約聖書』の出版とそれに続く諸釈義を発表するのは一五一六年（四七歳）以降のことである。

## (2) 敬虔 (pietas) と教養 (eruditio) の相違

エラスムスは、キリスト教にとって古典文化の学問教養が必要不可欠であることを主張しているのであるが、あくまで両者（すなわち「知っていること」と「行なうこと」）は別種のものであり、その起源を異にすることを指摘するのを忘れていない。「学問教養と徳は別のことです。良い人が直ちに学識があるわけではなく、学識のある人が直ちに良い人であるわけではありません」<sup>23</sup>。あるいは「教養は我々を天へと高めない。それでは無知がそうするのでしょうか？ 粗野がそうするのでしょうか？ 学問に精通することは良き精神を (bona mens) を作らない。それでは無学がそうするのでしょうか？ 学問は良き精神を作らない。なるほど私たちはそれを認めますが、悪い精神を作るわけでもありません」<sup>24</sup>。また「ヨドクス」私は、断固として次のように思い込んでいる修道者に時々会います。つまりキリスト教の敬虔は、彼の言うところの世俗の文芸と結びつかないと。ヘバトス彼らは間違っています。彼ら自身の場合にはその二つのものは結び付きません。彼らは両方とも持っていないのですから。しかしヒエロニムスやキプリアヌスやアウグスティヌスや他の多くの人の場合には結び付きました」<sup>25</sup>。先に述べたとおりエラスムスは、教父たちの持っている教養を「キリスト教的教養」と呼んだが、これはキリスト教のために使用された学問のことである。そして学識のある人々（教父）とは、何がキリスト教の正しい教えであるかを知っている人々である。しかし彼らは

そのことよって敬虔であるのではない。敬虔であるのは、自分が知っていることに従う人である。「学識のある人だけが天に到ることができるのか」という問いに対して、次のように答えられている。「そのような神秘的な名称（驢馬、鳩、小羊）は、知識（scientia）ではなくて、行為（mores）に関係づけられなければなりません。より神学的に言うと、知性（intellectus）ではなく、情意（affectus）に関係しています」<sup>(28)</sup>。エラスムスにおいては「敬虔」「徳」「良い（人）」ということは同義語であって、「学識・教養」とは別の次元のものである。また「学識」の反対語は「粗野」「無知」「愚か」であって、「単純」（simplicitas）ではない。人が学識豊かで、同時に単純であること、また良い人であることは可能である。「鳩のように単純、素朴でなければならぬ」ということは、何も知らないで、無知のままではないければならないということではない。教養と敬虔は相反するものではないが、しかし二つのことは異なる領域に属するものである。

### (3) 「知恵」の役割

それでは次に古典文化の文献から採り入れた「人々の知恵」はキリスト教に何の役に立つのが考察されなければならない。この「知恵」は——すべてがそうであるというわけではないが——キリスト者も異教徒も人間である限り人間として共通に持っている、人間に関する、経験から得られるような真実である。エラスムスはこの「知恵」を、キリスト教の教えを原理として整理された思想の構図（世界観）のなかの部分部分を主張するときその説明として、言わば薬味のように添えるのである。そのことによってもたらされる効果は、文章を生き生きとさせ、柔らかくし、親しみやすいものにし、あるいは読む人を笑わせ、そこで一息つかせるとともに考えさせるといふことである。しか

しこの背後には、エラスムスは語っていないにしても、次のようなより積極的な意義が前提とされているはずである。あるいはこのような「知恵」を採り入れるということは、必然的に次のような積極的意味を持っている。一言でいうと、人間の具体的な生活の営みとキリスト教を結びつけるということである。「結びつける」というのは、互いに相手を説明するということである。キリスト教は、経験によって得られた真実の知恵が、キリスト教のなかではどのよう<sup>17</sup>に現われるかを示し、その知恵を深めたり、あるいは意味を付与する一方で、キリスト教は日常生活に根付くものとなる。また他方、経験から得られる真実によって、キリスト教の正しさが裏付けられることもある。このようにキリスト教の教えを骨格とすると、「知恵」は肉付けの役目をするのである。

しかし、古典を読んだり引用したりしただけで、非キリスト教的であると非難する人々がまだ多くいた当時<sup>18</sup>にあつては、この知恵の積極的意義はその効果を發揮することはできなかったであらう。

#### (4) 哲学的思想について

これまで「良き学問」「雄弁」「知恵」といった、エラスムスがギリシア・ローマの古典文化から積極的に取り入れようとしてきたものについてみてきた。しかしエラスムスは古典文化の遺産すべてを引き継ごうとしたのではない。「私たちは異教徒の学問から逃げるべきではなく、清め取り片付けてキリスト者の学問教養に移さなければなりません。……私がへ清め取り片付けてへと言ったのは知識 (scientia) についてはなくて、意見・見解 (opinio) のことです。異教の哲学者たちの誤りを読むことが有害なのではなくて、それらを教会の議論に混ざることが有害なのです」<sup>19</sup>この引用に見られるように、エラスムスが「知識」と「見解」をはっきり区別していることは注目に値する。「見

「解」は、キリスト教と相容れないような価値観・考え方であり、これはエラスムスにとっては哲学のことを指している。彼は哲学者に対して手厳しく次のように言っている。「彼らは、自分たちが真理の教師 (Magister) で、万物に熟達していると大胆にも公言して、あらゆる誤りの創始者であることが明白になっています。彼らの教えから私たちにすべての異端が生まれました。まるで破城槌のような彼らのゆがめられた論証 (enthymema) によって、あんなにしばしばキリスト教信仰の城壁が叩かれたのです」<sup>28</sup>。コルネリス・ド・フォーゲルはプラトン主義の思想を次のように分類している。まずプラトン主義のなかでキリスト教と対立する見解は、① 神に段階があるということ、② 始まりなしに存続している世界、③ 魂の輪廻転生、④ 認識によって魂は故郷に帰る<sup>29</sup>。次にプラトン主義がキリスト教と共有しているのは、① 可視的事物は根本的な実在ではない、② その不完全さの故に、可視的事物は完全に絶対的な実在を目指し、必要とする、③ この不可視の実在は、それに依存している可視的事物より無限に高い意義と価値を持っている、④ この根本的事実が、我々の生活と行動を規定しなければならない<sup>30</sup>。この分類のうち前者がエラスムスがいうところの哲学者の「見解」に概ね相当する。

## 結 論

エラスムスが古典文化から直接採り入れたのは文法、修辭学、弁証学、自然学などの良き学問、雄弁、そして人々の知恵である。しかしこれらのものは、確かに古代ギリシア・ローマが発見したものではあるが、ただ古代ギリシア・ローマのみに限定されて特徴的なものというよりは、広く人間一般に通用する客観的学問、また人間一般に共通する

経験的眞実である。エラスムスはこれを知識 (*scientia*) と呼び、何らかの価値観・世界観や判断を含む見解 (*opinio*) と區別し、後者は取り除くべきであると言っている。従つてエラスムスは、「古典文化とキリスト教の統合」を試みたというよりは、「人間一般に共通する学問・眞実を、キリスト教のために有効に使用し、また結びつけた」と言えるのではないだろうか。この点でエラスムスは革新的であつたというのではなく、三〇四世紀の教父たちの後に続いてゐるのである。これはイェーガーが『初期キリスト教とパイデア』のなかで述べていることである。また『反野蠻人論』では、古典文化の知識は表現の巧みさとしての役割が主であるが、エラスムスは後にこれをさらに、聖書解釈に文献学的方法を採用するという形で使用するのである。

エラスムスがヒューマニストであるかどうかという問題は、したがつて本来、キリスト教が異文化と接したときに、それとどのように関わるべきかという問題であり、キリスト教の土着化ということにもつながるものである。そして教父たちやエラスムスが直面したこの課題は、現代においては自然科学・技術、心理学、医学などによつて得られた知識とキリスト教の眞理との関係という形であらわれる。このことを念頭に置いたうえで、その時々々の「ヒューマニズム」、「ヒューマニスト」という言葉の使われ方に応じて、エラスムスの古典古代に対する態度などから考察して、彼がヒューマニストであるかどうかを判断するのが最も適当と思われる。

テクスト

略記号

Desiderius Erasmus: *Antibarbarorum Liber*, in: ASD I, 1, 35-

A = *Opus epistolarum Des. Erasmi Roterodami denuo recognitum*

136.

et auctum. Hg. Allen, Percy Stalford u.a. 12 Bde., Oxonii

1906-1958.

ASD = Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata, Amsterdam (spätere Bände: Amsterdam/New York/Oxford), 1969ff.

参考文献

- Augustijn, Cornelis: Erasmus von Rotterdam. Leben-Werk-Wirkung. Aus dem Holländischen übersetzt von Marga E. Bauer, München 1986.
- Bradshaw, Brendan: The Christian Humanism of Erasmus, in: The Journal of Theological Studies, Oxford 1982, Vol.33, Part 2, pp.411-447.
- Hyma, Albert: The Youth of Erasmus, Ann Arbor 1930.
- Kohls, Ernst-Wilhelm: Die Theologie des Erasmus, 2 Bde. Basel 1966. - Theologische Zeitschrift Sonderband 1.
- Kumaniecki, Kazimierz: Introduction to "Antibarbari", in: ASD I, 1, pp.7-37.
- Mestwerdt, Paul: Die Anfänge des Erasmus. Humanismus und "Devotio Moderna", Leipzig 1917. - Studien zur Kultur und Geschichte der Reformation 2.
- Pfeiffer, R.: Die Wandlung der "Antibarbari", in: Gedenkschrift zum 400. Todestage des Erasmus von Rotterdam, Basel 1936, 50-68.

Tracy, James D.: The Growth of a Mind, Genève 1972. -Travaux d'Humanisme et Renaissance 126.

訳

- (1) 『ルネサンスの思想』(東大出版会)107頁。
- (2) 『ルネサンスの思想』(東大出版会)107頁。
- (3) ASD I, 1, 80, 17f., 23f.
- (4) Ibid., 85, 18f.
- (5) Ibid., 98, 28f.
- (6) Ibid., 113, 11-13.
- (7) Ibid., 115, 3-5.
- (8) Ibid., 117, 19-23.
- (9) Ibid., 136, 15-17.
- (10) Ibid., 136, 22-28.
- (11) Ibid., 117, 10-15.
- (12) Ibid., 51, 14-17.
- (13) Ibid., 98, 19-21.
- (14) Ibid., 135, 21-27.
- (15) Ibid., 81, 23-82, 1.
- (16) Ibid., 100, 8-14.
- (17) Ibid., 100, 20.
- (18) Ibid., 103, 28-104, 5.

エラスムスにおける『反野蛮人論』とヒューマニズム(畑)

- (19) *Ibid.*, 128, 2-4.  
 (20) *Ibid.*, 103, 18-25.  
 (21) *Ibid.*, 199, 23-26. 「学問 (*litterae*) を学ぶことは一般的である必要はなく、教養のある人々がそんなに大勢いる必要もなく、多数は少数によつて導かれ得ると言う人々に耳を傾けるべきではないと私は思います。というのは、もしあることが少数の人々にとつて価値があるなら、多くの人々にとつてどうしてそれがいっそう優れたものでないことがあるでしょうか?」  
 (22) *Ibid.*, 98, 21-25. 「しかし、その才能がすばらしいことが約束されているように見える人を、極めて価値のある試みから遠ざけることは、「霊を消す」こと——パウロがそれを禁じているのですが——以外の何だというのでしょうか? もしこのことが、わたしたちがしばしば言及してきたあの最高の博士たちになされていたら、教会はきつと卓越した保護と慰めを奪われていたことでしょう。」  
 (23) *Ibid.*, 102, 1-3.  
 (24) *Ibid.*, 98, 5-8.  
 (25) *Ibid.*, 96, 29-97, 2.  
 (26) *Ibid.*, 99, 19-21.  
 (27) *Ibid.*, 112, 17-23.  
 (28) *Ibid.*, 116, 15-18.  
 (29) C. J. de Vogel, "Platonism and Christianity: A mere

Antagonism or a profound common Ground?", *Vigiliae*

*Christianae*, 39 (1985), p.3.

(30) *Ibid.*, pp.54f.

(31) W・イエーガー『初期キリスト教とバイデア』(筑摩叢書)二〇—二二二ページ。

#### 付 記

- (1) グラティアヌスからの引用  
 ①「司教は異教徒の著作を読んではならない。異端者の著作は、時と場合によつて必要なとき、入念に調べてもよい」(*Gratian I Dist. 37 c.1*)。  
 ②「彼らは強いワインに酔った人、つまり世俗の知識と弁証家のわなを誤用する人」(*Dist. 37 c.4*)。  
 ③「これらのことから結論は、世俗の学問に熟達しようとすることは、聖職者のためにならない」(*Dist. 37 c.7*)。  
 ④「モーセとダニエルがエジプト人とカルデア人すべての知識を身につけて了た」(*Dist. 37 c.7*)。  
 (2) ヒエロニムスからの引用  
 ①「もし私が世俗の知恵を、その表現の美しさで部分部分の魅力のゆえに、囚われの女奴隷からイスラエルの娘にしようとしても、何か驚くべきことでしょうか? 彼女のなかにある死んでいるもの、つまり偶像崇拜、快樂、誤り、情欲などをすべて取り除き、あるいは擦り取って、非常に美しい心

で永遠の主のために下僕を産むなら、何か驚くべきことでしょうか？ 私の労苦は、キリストの家族のために益になることです。姦淫は他の家族の役に立ち、奴隷の数を増やします」(Ep. 70. 2. 5)。

- ② 「あなたはあなたの手紙の終わりのところで、どうして私たちの書き物のなかで、時々世俗の学問の例を用いて、教会の輝きを異教徒たちの汚れでよごしてしまおうかと、お尋ねになりました。簡単に答えることにしましょう。もしあなたがキケロに完全には捕らえられていなければ、そして聖書を読み、聖書の解釈者たち(ウルカティウスは別として)を吟味しているなら、このようなことを決してお尋ねにはならないでしょう。モーセのなかに、また預言者の書き物のなかに、異教徒の書物から取り入れられたものがあること、またソロモンがティルスの哲学者たちに多くのテーマを提案して、何らかの方法で答えたということを知らない人がいるでしょうか？ したがって「箴言」の始めのところで彼が勧めているのは、私たちが分別のある話、微妙な言葉、格言、不明瞭な話、知恵ある人々の言葉、謎を理解するようにということです。これらは元来弁証家や哲学者の領域のことです」(Ep. 70. 2. 1)。
- ③ 「キリスト教軍隊の指導者であり、キリストに代わって弁護する無敵の弁論者パウロは、偶然見付けた碑銘を即座に信仰の論議に向けています(使徒一七・二三)。すなわち彼

は、敵の手から刀をもぎ取って、ゴリアテの傲慢きわまらない頭を自分の刀で切り落とすということを、真のダビデから学びました(サムエル上一七・五一)。彼は申命記で主の命令の声を読みました。すなわち、囚われの女の頭と眉毛を剃り、髪の毛と爪を切り落とし、それから妻として迎えるということです(申命記二一・一〇—一二)」(Ep. 70. 2. 4)。

- ④ 「ホセアは妻として淫行の女、ディブライムの娘ゴメル(すなわち甘美)を受け入れ、その娼婦からホセアにイスラエルの息子が生まれ、彼は神の種と呼ばれています(ホセア一・二—四)。イザヤは鋭い剃刀で、罪の髭と足の毛を剃りました(イザヤ七・二〇)。そしてエゼキエルは、エルサレムの淫売女の象徴として、自分の頭髮を切り、そのなかにある感覚も命もないものをすべて取り去りました(エゼキエル五・一)」(Ep. 70. 2. 6)。
- ⑤ 「彼ら(ギリシアの著作家)はすべて、これほどまでに哲学者たちの教えや意見で自分の本を満たしているので、それらのなかで世俗の教養かあるいは聖書の知識か、どちらを先に賞賛すべきかわからないくらいです」(Ep. 70. 4. 4)。
- ⑥ 「文法の教師、修辞学の教師、哲学者、幾何学者、弁証家、音楽家、天文学者、医学者」(Ep. 53. 6. 1)。
- (3) アウグスティヌスからの引用
- ① 「異教徒の生活において実践されている二種類の学問があ

- る。その一つは人間が定めたものであり、他はすでに完成されたものとして、あるいは神によって定められたものとして認められているものである。人間が定めたものうち、迷信的なものもあるし、迷信的でないものもある」(De doctrina christiana, II 19, 29)。
- ② 「アウグスティヌスの討論の學問 (disciplina disputationis) は、聖書のなかで扱われるべき、また解決されるべきあらゆる種類の問題に大いに役に立つ。ここで却けられなければならないのは、争おうとする強い傾向である」(II 31, 48)。
- ③ 「誤った命題 (sententia) を含む推論の帰結 (conmixio) がある。それは討論を行なっている人の誤りから生じることがある。しかし學識があつて良い人によつてもこういうことに到ることもある。その場合には、こういう誤りに結論として到達した人は、誤った命題を恥じて、その誤りを捨てなければならぬ。もしその人がその誤りに留まらうとするならば、自分が非難していることを支持せざるを得なくなつてしまふからである」(II 31, 49)。
- ④ 「たしかに教と音楽は聖書の多くの箇所で高い地位を占めていることに気付かされる。ところで九柱のムーサはエジプトルとメモリアの娘であると説明した異教徒の迷信による誤りに耳を傾けてはならぬ」(II 16, 26-17, 27)。
- ⑤ 「しかしもし聖書を理解するために音楽からなにか役立つものを撰取できるなら、ウァローが述べた通りであるうとな
- かろうと、異教徒の迷信のゆえに音楽から逃亡するには及ばない」(II 18, 28)。
- ⑥ 「教に通じていないと、聖書のなかで転義的で神秘的に (translate ac mystice) に述べられた多くの箇所が理解できなす」(II 16, 25)。
- ⑦ 「ところが事物についての知識がないと、比喩的表現 (figuratae locutiones) の意味がわからなくなる。こうしたことは、しばしば聖書のなかで、ある種の比喩のために (similitudinis alicuius gratia) 述べられている動物とか、石とか植物とかその他の事物の性質を知らないとき生ずる」(II 16, 24)。
- ⑧ 「ところで哲学者と呼ばれる人々が、たまたま真実なことや、我々の信仰と合致することを述べたとき、特にプラトン主義者の場合彼らを単に恐れてはならないばかりでなく、いわば不正な所有者からのように、彼らから返却を要求して我々のために役立てるべきである」(II 20, 60)。
- ⑨ 弁証学、修辭学、自然学、歴史などのような、人間の才能によつて発見された諸學問は、アウグスティヌスには金銀で刻印されているように見えた、と彼は書いています。なぜなら、人間はこれらのものを「自分で作り出したのではなく、どこにでも注意込まれている神の撰理という鉱山から、言わば金銀のように掘りだしたからです」(II 40, 60)。
- ⑩ 「ところでわれらの多くの高貴で、信仰に忠実な人々がやっ

たことも、これ以上のなんであるうか。雄弁な学者で至福な殉教者であるキプリアヌスが、いかに多くの金銀や衣装を背負ってエジプトから逃れたかを見ないであらうか。ラクタンティウス、ヴィクトリヌス、オプタトゥス、ヒラリウスは、どれほど背負って逃げたことか。現存の方々についてはふれないことにしよう。無数のギリシア人はどうか。もつとも忠実な神の僕であるモーセ自身、最初にこれを実行した。モーセについては、エジプト人のすべての知恵をもつて教育されたことが記されている。異教徒たちの迷信に満ちた習慣は、特にキリストの軛を却ける人々キリスト教徒を迫害していた時代には、こういったすべての人々に、彼らが有益であると思つている学問を決して許さなかつた。それは、空しい偶像崇拜を根絶するために、唯一の神を礼拝する目的でこれらの学問を転用するのではないかと思われたからである」(II, 40, 61)。

(4) 旧約聖書からの引用

- ① 「増長し、高慢な者、その名は不遜」(箴言二二・二四)。
- ② 「怠け者は自分を賢者だと思ひ込む／聡明な答えのできる七人にもまさつて」(箴言二六・一六)。
- ③ 「悪を行なうことにさどく／善を行なうことを知らない」(エレミヤ四・二二)。
- ④ 「決して目覚めようともし、善を行なおうともしない」(詩編三六・四)。

エラスムスにおける『反野蠻人論』とヒューマニズム(畑)

- ⑤ 「知恵が悪に打ち負かされることはない」(知恵七・三〇)。
- ⑥ 「無知な者は知恵をも論しをも侮る」(箴言一・七)。
- ⑦ 「確かな判断力と知識をもつように私たちを教えて下さい」(詩編一一九・六六)。

⑧ 「彼はいにしえのすべての人の知恵を詳しく調べ／預言の書の研究にいそしみ／高名な人々の話を心に留め／たとえ話の複雑な道へと分け入り／格言の隠れた意味を詳しく調べ／たとえ話のなぞをじっくり考える。／彼は身分の高い人々に仕え／為政者たちの前にも出入りする。／見知らぬ人々の国を旅し／人間のもつ、善い面、悪い面を体験する。」(集会の書三九・一一四)。

⑨ 「存在するものについての正しい知識を、神はわたしに授けられた。／宇宙の秩序、元素の動きをわたしは知り／時の始めと終わりと中間と天体の動きと季節の移り変り／年の周期と星の位置／生き物の本性と野獣の本能／もろもろの霊の力と人間の思考／植物の種類と根の効用／隠れたことも、あらゆることもわたしは知つた」(知恵七・一七一―二一)。

⑩ 「だれか正義を愛する人がいるか／知恵こそ働いて徳を得させるのだ。／すなわち、節制と賢明／正義と勇氣の徳を、知恵は教えるのである。／人生にはこれらの徳よりも有益なものはない。／だれか幅広い経験を望む人がいるか。／知恵こそ過去を知り、未来を推測し／言葉の理解や、なぞの解釈に秀でており／しるしや不思議／季節や時の移り変り

を予見する」(知恵の書八・七―八)。

(5) 新約聖書からの引用

- ① 「知識は人を思い上がらせる」(1コリント八・一)。
- ② 「たとえ、話す言葉は素人でも、知識についてはそうではありません」(2コリント一・一六)。
- ③ 「あなたが来るときに、わたしがトロアスのカルポの家に置いてきたマントを持って来て下さい。また書き物、特に羊皮紙のものを持って来て下さい」(2テモテ四・一三)。
- ④ 「悪い僕、なぜおまえはわたしの金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば、わたしは帰って来たとき、利子といっしょにそれを受け取れたであろうに」(ルカ一九・二三―二三)。
- ⑤ 「互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々の仲間となりなさい」(ロマ二二・一六)。
- ⑥ 「自分を買いかぶらず」(ロマ二二・三三)。
- ⑦ 「思い上がってはいけません。むしろ恐れなさい」(ロマ一・一一〇)。
- ⑧ 「自分は何かを知っていると思う人がいても、知っていないければならないようには、まだ知っていないのです」(1コリント八・一二)。
- ⑨ 「もし、あなたがたのうちに自分をこの世で知恵のある者と思う人がいるなら、ほんとうに知恵のある者となるために、愚かな者となりなさい」(1コリント三・一八)。
- ⑩ 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする」(1コリント一・一九、イザヤ二九・一四)。
- ⑪ 「上からの知恵はまず第一に清く、次に平和な、寛容な、温順なものであり、あわれみと善い実とに満ち、真心のもった、偽りのないものです」(ヤコブ三・一七)。
- ⑫ 「へびのように賢く、鳩のようにすなおになりなさい」(マタイ一〇・一六)。
- ⑬ 「悪事については幼い子どものように純真でありなさい。しかし物を判断することにおいては一人前の者となりなさい」(1コリント一四・二〇)。
- ⑭ 「しかしあなたたちは、引き渡されたときに、何をどう言うかと心配するな。言うべきことは、そのときあなたたちに授けられるからである。語るのはあなたたちではなく、あなたたちの父の霊があなたたちを通して語るのである」(マタイ一〇・一九―二〇)。
- ⑮ 「預言は決して人間の意志によつてなされたものではありません。聖霊に動かされた人々が、神からのことばを語ったのです」(2ペテロ一・二二)。
- ⑯ 「あなたがたのうち、知恵の欠けている人があれば、その人は、神に求めなさい。そうすれば与えられるでしょう。神はすべての人に惜しみなくお与えになり、とがめるようなこととはなさいません」(ヤコブ一・五)。